



TITLE:

ヒュームの懐疑主義的自然主義  
——『人間本性論』における方法  
・実践・帰結——(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

澤田, 和範

---

CITATION:

澤田, 和範. ヒュームの懐疑主義的自然主義——『人間本性論』における方法・実践・帰結——. 京都大学, 2020, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22187>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	澤田 和範
論文題目	ヒュームの懐疑主義的自然主義 ——『人間本性論』における方法・実践・帰結——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>18世紀スコットランドの哲学者ディヴィット・ヒュームの『人間本性論』（以下『本性論』）は、独創的な思索が精緻かつ縦横に展開された、哲学史上に残る紛れもない傑作である一方、若き天才がその天稟に任せてがむしゃらに書き切った作品と評さざるを得ない側面を持った書でもある。結果として、「『本性論』が全体として、どのような哲学的立場に立っているか」に関して、言い換えると、「『本性論』とは一体何であるのか」について、ヒュームの同時代から今日まで議論が絶えない状況が続いている。この意味でも『本性論』は、哲学史上屈指の問題作であると言えるのである。</p> <p>『本性論』の立ち位置に関しては、これまで、懐疑主義と自然主義という二つの軸（ないし極）の間で議論がなされてきた。言い換えると、ヒュームを懐疑主義者と見るか、はたまた自然主義者と捉えるかという、二つの解釈上の立場が競い合ってきたのである。</p> <p>例えば、ヒュームの同時代人トマス・リード、ヒュームによって「独断のまどろみ」から覚醒されたと自任するカント、19世紀末にヒュームの著作集を編纂したT.H. グリーン、『西洋哲学史』におけるラッセルらは、ヒュームを、ロックが提示した経験主義的な世界観を内部から徹底的に破壊した懐疑主義者として捉えてきた。一方、「ヒュームの自然主義」（1905）というヒューム研究史上、記念碑的な論文を著わしたケンプ・スミスは、「自然的信念(natural belief)」という語を導入することで、ヒュームを、理性をターゲットとする懐疑に対する免疫を備えた自然的信念の体系として我々の世界観を再構築した自然主義者として描いた。</p> <p>近年、英語圏、ひいては我が国のヒューム研究では、このケンプ・スミス流の自然主義解釈が主流であるが、自然主義解釈、懐疑主義解釈のいずれの解釈も、ヒュームの懐疑主義と自然主義を、互いに両立不可能な立場、即ち二者択一的な哲学的オプションだと見なす点では軌を一にしている。従来 of 諸解釈は、ヒュームの懐疑主義と自然主義に関する「両立不可能性テーゼ」にコミットしてきたのである。</p> <p>それに対して本論文は、『本性論』を始めとするヒュームのテキストを徹底的に読み込むとともに、二次文献も幅広く渉猟した上で、懐疑主義や自然主義を巡る現代哲学の議論をも視野に入れ、この「両立不可能性テーゼ」を退ける。本論文は、ヒュームの懐疑主義と自然主義を、従来理解されてきたあり方よりも、それぞれより徹底した立場であると解釈することで、二つの「主義」は互いに両立可能な仕方で理解することが可能だという「両立可能性テーゼ」を打ち出すのである。言い換えると、本論</p>			

文は、ヒュームの懐疑主義と自然主義の解釈をそれぞれ革新することで、『本性論』を、懐疑主義的と自然主義が整合的かつ緊密に結びついた「懐疑主義的自然主義」の書として読み解くという、世界的に見ても極めて斬新な解釈を提示したことになる。

本論は、それぞれヒュームの自然主義と懐疑主義に関する解釈の革新を目指す第一部（第一章から第三章）と第二部（第四章・第五章）からなる。

第一章「必然的結合」と因果推論」では、ヒュームの懐疑主義の主要なターゲットの一つでもあり、またヒュームの哲学探究の方法論の核でもある因果推論に議論の焦点を絞ることで、「方法論的自然主義的」と本論文が呼ぶ、ヒュームの自然主義の決定的に重要な側面を明らかにすることが目指される。具体的には、本章では、ヒュームは、単に懐疑的な議論（懐疑論）を駆使して、原因と結果の間の必然的結合を否定することで因果推論を排斥したのではなく、我々が因果関係に関して抱く必然性というイメージが生まれる起源を探り、それを我々の精神が決定されているという感じ、即ち「被決定感」という内的感覚だと見なしたという解釈が提示される。この解釈は、因果関係の必然的結合に関する「非表象説」と呼ばれるが、本章は、従来の非表象説を補強するとともに、そこから、哲学探究の方法の妥当性と、その方法によって得られた探求結果の正当性が相互に依存していること、言い換えると、両者が循環していることを公認し引き受ける方法論的態度としての「方法論的自然主義」をヒューム哲学の一つの核心として描き出そうとするのである。

第二章「一般規則」の発生論的解釈」では、第一章で因果関係の必然性に関して示された自然主義解釈を、因果推論が従うべき規則としてヒュームが提示した「一般規則」に関しても拡大適用することが試みられる。そのことで、一般的規則という認識論的な「規範」についても、ヒュームが目指したのは、その「正当化」ではなく、その自然的な発生の「起源の特定」であるという、斬新な解釈が提示されるのである。

第三章「情念論における実験的推理法」では、従来、等閑視されてきた、ヒュームが『本性論』第二巻「情念論」で示した「実験的推理法」を取り上げ、それをニュートンの『光学』における「分析と総合の方法」と比較することで、その仮説演繹法の一つのプロトタイプとしての意義を明らかにすることが目指される。そのことで、本論文が解明しようとする、ヒュームの「方法論的自然主義」に対して方法論的実質が与えられるのである。

第四章「懐疑と自然」は、「理性に関する懐疑論」と「感覚能力に関する懐疑論」という一見極めて破壊的に思えるヒュームの懐疑論に、自然主義的なモーメントを読み取ることで、それらが方法論的自然主義にもとづいた「自然主義的懐疑論」であることを論じようとする。具体的には、これらの懐疑論は、理性と感覚能力という我々の精神能力に関する経験的な観察にもとづいた議論であることが示されるのである。

このことから本章は、ヒュームの方法論的自然主義と懐疑主義が、実は表裏一体の関係にあると論決するのである。

第五章「ピュロン主義的メタ哲学」では、従来、「理性が提示する世界観の無根拠性を暴くことで、それらを破壊し否定する立場」としてのみ捉えられてきたヒュームの懐疑主義が、「理性的世界観の無根拠性」という懐疑論の結論すらをも更に疑う立場、即ち、「懐疑主義に対する懐疑主義」という意味での「二階の懐疑主義」として描かれる。本章によれば、このような二階の懐疑主義こそが、ヒュームがその懐疑論の模範としたピュロン主義の神髄なのであり、ヒュームはその意味で、ピュロン主義の正統な後継者であるとされる。

最終章「結論」では、ヒュームの懐疑主義と自然主義を、それぞれ「二階の懐疑主義」と「方法論的自然主義」と解釈した上記の諸章での議論を受けて、両者が両立可能であることが主張される。ここでは、ヒュームの懐疑主義と自然主義は密接に関連していること、言い換えると、両者は「懐疑主義的自然主義」という一つの整合的な立場を形成していることが確認されるのである。

以上のような本論文のヒューム解釈は、ヒュームにおける自然主義と懐疑主義の緊密な一体性を明らかにした点で、従来の諸解釈とは一線を画す業績であると評することができる。近年、流行しているヒュームの自然主義解釈では、ヒュームの自然主義は懐疑主義に対する免疫性を備えた立場として描かれてきた。このことは、従来の解釈では、ヒュームの懐疑主義と自然主義が、相対立し、拮抗する立場として捉えられてきたことを意味する。このような従来の学説の、いわば暗黙の共通了解を明るみに出し、それに挑戦する解釈を提示した本論文は、極めて野心的かつ独創的なヒューム解釈として高く評価できる。

また、このような新解釈を提示するに当たって、本論文は、ヒュームのテキストの綿密な読解に加え、広く二次文献にも当たっている。そのことで、本論文の解釈は、単なる「思いつき」の域をはるかに超え、世界のヒューム研究者が真剣に応答せざるをえない重厚な見解となりえている。本論文が、今後のヒューム研究に大きな一石を投じる世界的な注目作になることが大いに期待される所以である。

(論文審査の結果の要旨)

18世紀スコットランドの哲学者ディヴィット・ヒュームの『人間本性論』(以下『本性論』)は、独創的な思索が精緻かつ縦横に展開された、哲学史上に残る紛れもない傑作である一方、若き天才がその天稟に任せてがむしゃらに書き切った作品と評さざるを得ない側面を持った書でもある。結果として、「『本性論』が全体として、どのような哲学的立場に立っているか」に関して、言い換えると、「『本性論』とは一体何であるのか」について、ヒュームの同時代から今日まで議論が絶えない状況が続いている。この意味でも『本性論』は、哲学史上屈指の問題作であると言えるのである。

『本性論』の立ち位置に関しては、これまで一世紀以上、懐疑主義と自然主義という二つの軸(ないし極)の間で議論がなされてきた。言い換えると、ヒュームを懐疑主義者と見るか、はたまた自然主義者と捉えるかという、二つの解釈上の立場が競い合ってきたのである。だが、これらの両陣営とも、ヒュームの懐疑主義と自然主義を、互いに両立不可能な立場、即ち二者択一的な哲学的オプションだと見なす点では軌を一にしている。従来、諸解釈は、ヒュームの懐疑主義と自然主義に関する「両立不可能性テーゼ」にコミットしてきたのである。

それに対して本論文は、『本性論』を始めとするヒュームのテキストを徹底的に読み込むとともに、二次文献も幅広く渉猟した上で、懐疑主義や自然主義を巡る現代哲学の議論をも視野に入れ、この「両立不可能性テーゼ」を退ける。本論文は、ヒュームの懐疑主義と自然主義を、従来理解されてきたあり方よりも、それぞれより徹底した立場であると解釈することで、二つの「主義」は互いに両立可能な仕方で理解することが可能だという「両立可能性テーゼ」を打ち出すのである。言い換えると、本論文は、ヒュームの懐疑主義と自然主義の解釈を革新することで、『本性論』を、懐疑主義と自然主義が整合的かつ緊密に結びついた「懐疑主義的自然主義」の書として読み解くという、世界的に見ても極めて斬新な解釈を提示したことになる。

まずヒュームの懐疑主義は、従来、「理性が提示する世界像や自己像の無根拠性を暴くことで、それらを破壊し否定する立場」としてのみ捉えられてきたと、本論文は見る。これに対して本論文は、ヒュームの懐疑主義は、さらに徹底した立場なのであり、「理性的な世界像・自己像の無根拠性」という懐疑的議論(即ち懐疑論)の結論すらをも更に疑う立場、即ち(「懐疑主義に対する懐疑主義」という意味で)「二階の懐疑主義」として理解されるべきだと主張する。

また一方、本論文によれば、従来、解釈者たちは、ヒュームの自然主義を、理性に対する懐疑の後にもなお残る、人間が自然に信じざるを得ない「自然的信念」の存在を明らかにすることで、懐疑論の破壊力の及ぶ範囲を理性に限定する一方で、感情と本能が理性に優位している人間の自然本性の実態を暴く立場であると解釈してきたとされる。それに対して、本論文はより徹底した自然主義として、人間本性を探究する際の自然主義的な方法の「正当性の欠如の公認」という側面に着目する。ここで言わ

れる人間本性探求の「自然主義的方法」とは、例えば因果推論の規則といった認識論的な規範や、その規範に則って獲得された信念を、何らかのアプリオリな議論によって正当化することを断念し、代わりに、その規範や信念が人間本性に従って自然に生成される因果プロセスを、内観心理学的な実験を通じて、経験的に明らかにする方法を指す。このように、この探求では、我々が自然に身につけたとされる因果推論が、その妥当性が保証されないまま公然と用いられているのである。このように、自然な認識論的規範を、その妥当性ないし正当性の担保なしに用いざるを得ないと認定する方法論的態度を、本論文は「方法論的自然主義」と名付け、これこそが、ヒュームの自然主義の核心だと主張するのである。

このようにヒュームの懐疑主義と自然主義を、それぞれ「二階の懐疑主義」と「方法論的自然主義」と解釈した上で、本論は、両者が両立可能であると論じる。方法論的自然主義が、因果推論の正当化を断念した理由は、それに対する懐疑論の疑念を受入れたために他ならない。しかし二階の懐疑論へと徹底された懐疑論は、因果推論の妥当性に対する自らの疑念自体にも疑いの目を向ける。結果として、因果推論、ひいてはそれにもとづく自然主義的探求は、間違っている可能性も、正しい可能性も、共に孕んだ知的営みと見なされることになる。このことを見極めた上で、正しい可能性に賭けるのが方法論的自然主義に他ならない。このようにヒュームの懐疑主義と自然主義は密接に関連している。いやむしろ、両者は、「懐疑主義的自然主義」という一つの整合的な立場を形成している。このように本論文は結論づけるのである。

以上のように『本性論』に対して斬新で独創的な解釈を提示した本論文ではあるが、そこに瑕疵がないわけではない。例えば、全体の論旨に引きずられる形で、ヒュームのテキストの読解が、やや強引になっている箇所も見受けられる。また肝心の「方法論的自然主義」の特徴付けが、これまたやや多義的である点も惜しまれる。ヒュームの自然主義に対する、より一義的で明確な規定が望まれるのである。

しかし以上の欠点は、本論文の価値を大きく損ねるものではなく、著者の今後の精進によって克服されるであろうことが十分に期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月16日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。